



無量寺住職 堤 俊翁

御挨拶

就任早々、久留米門中寺院年番御忌法要、先代住職遷化葬儀、恒例の大施餓鬼法要、盂蘭盆と矢継ぎ早に大きな行事が続きました。

皆様の御協力のおかげで無事おえることができました。

寛永3年(西暦1626年)来誉上人萬哲和尚がこの無量寺を創建されて370年あまり(如来様がお姿をあらわされたのは鎌倉時代ですが)本堂の阿弥陀如来様は、祈りを捧げる人々を静かに見つめてこられたのであります。

今にいたるまで、いったいどれほど多くの人々が参詣されたことでしょうか?

その法灯を引き継ぐということがいかに責任の重いことであるかを感じている次第です。

壇信徒の皆様方のお家に祀られているお仏壇の如来様は、歴代の住職方が開眼された佛様であり、本堂の如来様の分身であります。

壇信徒のみなさんの心のよりどころは、この本尊様であると思われ、拝んでいただきますようお願いいたします。



無量寺 本堂 内陣

葬儀を考える

仏教八万四千の法門は「死」の一字を説くといひます。「死」はすべての終わりではなく、すべての生きとし生ける者が通るべき通過点なのです。「死」を迎えるにあたってどんな準備をすればよいのか?よりよい「死」をむかえるための生活とは?仏教はそのことを説いているのです。

先日NHKのテレビで(ときめき歴史館)という番組がありましたが、その中で、平安時代の人々が極楽往生を願って行った信仰生活の様子が再現されていました。

臨終を迎えようとする人を、心安らかに送る作法が細かく紹介されていました。

当時は病院で亡くなる人はいなかったと思われ、9割近くの人が病室で「死」を迎える今の時代こそこうした看取りができるようにならないものかと思ひます。

死後の散骨や生前葬など葬送を考えるようになったことは、死を封じこめるのではなく自分のことと前向き

にとらえる良い傾向だと思ひます。生をまっとうするための臨終を一生の一大事と受け止めた信仰生活こそ、真の心の癒しなのだと思ひます。

お寺にいらっしやい

お寺にみなさんがこられる時それは、法事、法要、墓地、納骨堂参りの時などです。

今の時代、休みの日には行くところがたくさんありますね

人が落ち着ける場所、癒される場所であるお寺の境内に足を運ばれるようになるといいなと思ひています。

これからお寺では法事ごとや盂蘭盆、彼岸法要などばかりでなくいろんな行事、発表会などに施設を利用していただくと考えています。

書道展、絵画の個展、音楽会、講演会など場所を捜しておられる方はどうぞ御相談下さい。

仏事のQ&A

Q お彼岸などお墓参りの

時、お花やお線香と共にお水をお供えしますが、これにはどういう理由があるのでしょうか。その意味を教えてください。

A お彼岸

にはどなたもお寺参りをします。その時お墓にお供えするお花やお線香は注意して用意されますが、当たり前のこととしてみんなでお供えするのがお水です。日本では、お金のむだづかいを「湯水のように使う」などといって、水は決して貴重なものに思われていなかったのに、なぜお水が欠かせないものになったのでしょうか。お供えするお水は、昔「アカー關伽」といわれました。お墓へもっていく水桶を「アカ桶」といった具合に使ったのです。アカはインドの言葉で「価値あるもの」という意味のアルガあるいはアルグヤのなまった言葉です。お供えものは最も価値のあるものを捧げるのが当然ですから真心を捧げるためには大切なもの、食物・お金・飲物と、生前の好みも考えていろいろお供えします。でも人間にとって一番大切なもの、最も価値あるものは何でしょう。

それは生命です。ですから宗教によっては、動物のいけにえを捧げ物にするものもあります。しかし平和な教えの仏教では、じかにいけにえを捧げたりせず、もう少し深く、生命の源は何だろうと考えて、水をお供えするのです。お金も価値あるものです。食物も大切です。お酒だって、好きな人にとっては何よりのものかもしれません。しかし最後までつきつめていって、生命をつなぐものは何かといえば、それは水です。断食は三週間耐えることができても水なしでは三日の生命も危ないといわれています。最も価値あるお供え物、アカは、だからいつしかお水のこととなり、お墓参りには必ずお水を捧げるのです。インドのラ

ダックというところに行って、海拔三千メートル以上の砂漠の中のお寺にお参りした時、だんだん身体中から水気が抜け、ふらふらになって頭もぼんやりしかかったような状態で、水筒から紙コップに半杯の水をいただきました。そのお水のおいしかったこと。思わず同行のもの「お墓にお水をあげるわけが分かった」といい合いました。日本では、お水はただのように思い、湯水のように使ってあたりまえと感じています。でも生水が飲める国は、実は世界中で日本だけといって過言ではありません。お釈迦さまの伝記も甘露の産湯ではじまり、沙羅双樹の下の末期の水で終わっているように、水は生命の象徴の大切なものです。お墓参りの時には、最も価値ある生命をお捧げする心持ちで、お水をお供えしましょう。

浄土宗なんでも相談室より

え！これが仏教語？

出世(しゅっせ)

もともと「出世」は読んで字の如く「世に出る」つまりこの世に生まれ出る(出生)のことである。

ことに仏教では、仏が衆生済度のためにかりに人間の姿となって娑婆世界に生まれ出られたことから、名付けられた語句である。一方、この俗世間があまりにも汚く、修行しにくい環境であるのを嫌って、静かな山林に隠れたり(遁世)仏門に入ったり(出家)することも、出世間、略して出世といい、転じて僧一般をさすようにもなった。

仏壇の祀り方

家での信仰の中心になるのが仏壇です。仏壇がどのようにできたのか、簡単にお話しましょう。仏壇の起源は、天武天皇の十四年(六七五)の「家ごとに仏舎を建てて、仏・法・僧の三宝を供養なさい」という言葉からとされています。ですが、当時は貴族などの比較的・社会の中でも裕福な人のもので、一般家庭に仏壇が置かれるようになったのは江戸時代に入ってからのことでした。仏壇はその構造をお寺の本堂にまねてつくっています。まず仏壇の主役たちについてお話ししましょう。主役は何といっても、浄土宗の本尊である阿弥陀さまです。そして観音菩薩、勢至菩薩を加えた弥陀三尊、中国で浄土教を広められた善導大師、そして浄土宗を開宗された法然上人・円光大師一、こうした仏さまや祖師の像や掛軸、あるいは南無阿弥陀仏の六字の名号が仏壇の主役です。こうした主役をお祀りし、そして次の主役である自分の命をはぐくんでくださったご先祖の諸霊をお祀りするのが、この仏壇です。ですから仏壇は家族の誰でもが、いつでも手を

合わせられる所にあるのが理想的です。都会やその近郊住宅街のように、マンションや一戸建でもそれほど広くない家ではなかなか見かけなくなった仏間ですが、仏間はまさに仏さまや、ご先祖さまのための空間です。仏間のような専用の部屋がもてないときも家族がお勤めしやすい所におくようにしたいものです。そしてできれば座って拝む高さに置いても、立って拝む高さに置いても、どちらの場合でも、顔を少し上に向けるぐらいの位置がよいでしょう。できるだけ見下ろさないようにしたいものです。住宅事情や家族構成などがさまざまな現代ですから、理想的な置き方通りに置くことは難しくなっていますが、できればこう置きたいとい置き方を書き出してみましょ

- ・いつも家族と一緒にの場所で家の中心となる所に置く。
- ・静かにお勤めできる所に置く。
- ・拝むときに西を向けるよう、本尊さまが東を向く所に置く。
- ・拝むときに少し見上げる高さに置く。
- ・神棚と向かい合わせにならない所に置く。
- ・上にものを乗せたり、階段の下にならない所に置く。